



～ 秋のダイナミックワールド ～
黄の1組(年中児)で展開されている遊び

ミミズハウス

1学期「ミミズごっこ」をしながら「ミミズ探究」をしてきた子どもたちから、2学期になっても「もっとミミズの気持ちになって遊んでみたい!」という声から生まれた遊び。ミミズになりきって遊ぶうち、「ミミズのおうちがほしい!」「ふかふかの土(のおうち)がほしい!」との声があがりました。「でも、本物の土はお部屋の中には入れられないね」「本当の土だと汚れちゃう」などの意見もでて、話し合いの結果、「紙を溶かして柔らかくしたら土みたいになるかも!」ということになり、新聞紙を水に溶かしての「土」づくりが始めました。その中で、「紙は水に弱いこと」「溶けた紙は好きな形につくり変えられること」「乾くとまた使えること」など、紙という素材の特性にも気づいたり、紙を再生して使うシステムが社会の中にあること、そうするとごみが減るので地球に優しいということなどにも気づいたりしました。現在は、ミミズの衣装をつけ、出来上がったミミズハウスの中で、ミミズになりきって遊んでいます。



虫になりきり! 変身スペース

「もっとミミズらしくなりたい!」「ミミズになりきるための服がほしい!」という子どもたちの願いから生まれた遊び。他クラスの友達が遊びにくると、「一緒にミミズにならない?」とミミズごっこに誘ったり、「ミミズは手と足は動かしません」「体をクネクネさせてくださいね」などと伝えたりしながら楽しそうにしていた子どもたち。「もっとミミズらしくなれるように洋服がほしい」という声があがり、保育者と一緒に形や素材を考えながらミミズに変身するための衣装をつくっていききました。「お友達にも貸してあげよう!」という意見から、衣装を貸し出すお店へと遊びが発展しました。「着替えるスペースは暗くして土のなかみたいにして!」「ミミズだけじゃなくて、アリにもなれるようにしよう」とアイデアはどんどん膨みいろいろなアイテムが増えていきます。



ミノムシのポンポンづくり

巻いた毛糸を切ってポンポンをつくっていた子どもたちが、「ミノムシみたい!」「木に吊るしてあげたい!」と言ったことがきっかけで生まれた遊び。

最初は、ポンポンをつくと、自分のカバンにつけたり家族へのプレゼントにしたりしていた子どもたち。ある子が「ミノムシ」に見立てたことで遊びがさらに広がっていききました。「どうやって木に吊るそう?」「本物の木には届かないよね」「自分たちで木をつくったらいいんじゃない?」との意見から、手作りの木もつくり、毛糸のミノムシを飾っています。



虫たちの運動会

運動会後、「お部屋でも運動会をしたい!」と子どもたちが言ったことがきっかけで生まれた遊び。身近な素材を利用してパラバルーンや竹太鼓など、「運動会ごっこ」に必要なものを自分たちで工夫してつくっていった子どもたち。「青組さん(年長児)のパラバルーンは大きなビニールでつくろう」「この長い棒(筒状の長い棒)は竹太鼓にしよう」と、自分たちで素材を選びながら次々に形にしていきました。最近では小さな虫の世界で遊んでいた子どもたちが「虫たちの運動会にしよう!」と提案し、さらに盛り上がっています。



ちいさなアリの世界

アリの飼育観察をするなかで生まれた遊び。アリの飼育観察をしながら、アリへの関心も高まっていった子どもたち。友達と列をつくり歩きながら「アリごっこ」をする姿も見られました。保育者が「アリってどんな生活をしているんだろうね?」「アリに見えている世界は人間に見えている世界とは違うのかな?」と問いかけたり、7月にブーク人形劇で観た宮沢賢治原作の「アリときのこ」のお話を振り返り、「アリから見たら小さなキノコも大きく見えていたよね」などと話しをするなかで、アリの世界へのイメージが膨らんでいったようでした。「アリは餌になるものを運んでるよね」「甘いものや昆虫などを餌にしてるんだよ」「アリの卵を育てるところをつくろう!」「大きなキノコの道もつくろう!」などと言いながら、子どもたちは身近な素材を用いて「アリの世界」をつくっていききました。



アリの飴やさん

アリになりきって遊ぶなかで、アリの大好きな飴をつくりたいという声があがり始めた遊び。「溶けて形が変わる」素材に注目し、遊びに必要なものをつくってきた子どもたち。はじめは、ミミズハウスづくりの体験を生かして、新聞紙を水につけて丸め、アリの飴をつくっていましたが、やがて、「もっと本物の飴みたいにつくってみたい!」「ほかの材料でもやってみよう」という意見が出てきました。ちょうど少し前に、「溶ける素材」集めをしていた子どもたち。その中にロウソクがありました。「ロウソクは火で溶けるんだよ!でも、たらずと固まるの!」「つやつやしていて本物の飴みたいになりそう」という意見がたくさん出され、ロウソクを溶かしての飴づくりが始まりました。あたたかいお湯の中で固いロウソクが液体になり、また固まっていく様子を不思議そうに眺めながら、予想通り飴ようになったことを喜んでいました。「つくった飴をほかの虫さんにもあげたら喜ぶよね」と「アリの飴やさん」ごっこへと発展していききました。

